



## 『贗作ドン・キホーテ』

いま『ドン・キホーテ』を読んでいる。ああ、あの有名なセルバンテスの小説かと思われるだろうが、そうではない。この『ドン・キホーテ』の作者はアベリャネーダという人である。

『ドン・キホーテ』という小説が初めて世に出たのは一六〇五年。風車を妖怪と勘違いして槍で突撃するなど、突拍子もない奇行を重ねる変人が主人公だが、これはもちろん作者セルバンテスが創造した人物であり、作品である。

で、この小説がすごく面白くて大評判になり、続編を待ち望む声が上がった。ところがセルバンテスが続きを書き上げる前に、何と！『ドン・キホーテ続編』が世に出てしまったのだ。作者はアベリャネーダである。

アベリャネーダも多少は罪の意識があったのか、しかしさすが図々しく、序言で「ある物語が複数の作者を有することは別段目新しいことではない」と聞き直り、幾つか例を挙げている。それが本当なら、ずいぶん鷹揚な世の中だったものだ。著作権論議がやかましい現代では考えられない。

面白いのは本家本元のセルバンテスがこの二セ後編の出現に驚き、それを丁寧に読んだことである。そこまでは分からないでもないが、読んで怒った結果、その二セ後編への批判反論を自作の『ドン・キホーテ』に書き込んだのだ。

私は始め、そんな経緯をまったく知らず素直に前編を読み、大ファンになって後編を読んだら、各所にアベリャネーダという人の名が出てくる。これはいったい何だろうと思ったのが、この贗作騒ぎを知ったきっかけだった。

ニセモノが先に出て、涼しい顔で続編に成りすまし、ホンモノのほうは後から出て来て文句を言ってるのだから、そこだけ見ると何



## 『贗作ドン・キホーテ』

だかホンモノが初手から負けてるようでもあって、これまた小説『ドン・キホーテ』のすつとぼけた面白みになっている。

やっぱりニセモノも読まなくては勝敗は分からない、そう思って『贗作ドン・キホーテ』を読み始めた。『贗作』とは後世の呼び名で、当時の表紙にはもちろんそうは記されていない。それどころか原本では、痩せ馬に乗った「蒼面の騎士」の版画まで、そっくりだったらしい。たぶん当時の人々は作者の名など気にせず、これがホンモノだと思って読んだのではないだろうか。

では肝心の文学作品としての良し悪しはどうかといえば、これはもう紛れもなくセルバンテスに軍配が上がる。スペイン語の質は私には分からないが、ドン・キホーテという人物の描き方がまったく違うのである。

ホンモノの主人公もニセモノも、どちらも困った笑える人間なのは同じだが、ホンモノには読者の胸にまっすぐ迫る愛嬌と切なさがある。こっけいでも品位が高い。セルバンテスはこの人物像を通して自分を描いた、と文学史にある通りだ。ドン・キホーテは作者そのものであり、それゆえに、読んでいる私でもある。片やニセモノのほうはただの奇矯な変人にすぎない。

芸術における真贋の違いを知るだけでなく、知的財産権との絡みでも考えさせられることの多い話だ。

本文初出：北国新聞「北風抄」二〇〇七年四月

ホームページ掲載：二〇二二年九月

# 『廣作ドン・キホーテ』

